

令和四年度

龍谷大学付属

平安中学校入学試験問題

受験番号

国語

解答上の注意

- 一. この問題用紙は「はじめ」の合図があるまで開いてはいけません。
- 二. 答えはすべて解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 三. 解答用紙の決められたところに受験番号を書きなさい。氏名を書いてはいけません。
- 四. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
- 五. 問題内容についての質問は受けません。
- 六. 印刷が読みにくいときは手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七. 「やめ」の合図があったら解答用紙をおもて向け、問題用紙を解答用紙の上に置いて、回収が終わるまで席を離れてはいけません。（問題を持ち帰ることができません）

□ ① 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。
文章 1

日本では昔から、大事なことを決めるのは「人」ではなく「空気」だと言われます。誰が見ても□ I ではないことが「その場の空気がそうだったから仕方がない」と決定される。有名な例だと第二次大戦の戦艦大和がそうです。あきらかに※無謀な作戦で出撃したのは「会議の空気」がそうさせたからだと言山本七平さんが『「空気」の研究』という本の中で論じています。

たいへん情けない話ですね。この“空気の支配”はおそらくみなさんのクラスや職場のなかにまだ残っています。誰かが□ II に決定するのでなく、その場の流れや勢いで決めてしまうことがありませんか？ ときにはこの空気の支配が良い方向に行くときもありますが、基本的には好ましいことではありません。誰もその決断に責任が取れないからです。お神輿をイメージするとわかりやすい。誰がお神輿を担いでいるかわからなくても、あるいは一人ぐらいいは神輿にぶらさがっていても、神輿じたいは進んでいきますよね。「① 共同責任は無責任」ということです。

残念ながら、※コミユカ至上主義の下では空気に※翻弄されやすい。というのも、われわれ日本人のいう「コミユカ」なるものが欧米でいうコミュニケーションスキルとはまったく別ものだからです。欧米でいうコミュニケーションスキルとは、デベート能力や□ III にならずに論理的に相手を説得する能力のことを指しますが、日本でいうコミユカは、空気を読む能力、人をいじる能力、笑いをとる能力のことです。

思春期・青年期のコミユカのロールモデル（模範にする人物）はお笑い芸人だと思えます。芸人はキャラを立てて、笑いを取りに行つて、人をいじつて、空気を読む。この作法をわれわれはテレビから学び、それを教室空間で再現しているのです。ひ

とつ※モードとしてなら笑いを取るコミユカがあつてもいいと思えますが、そのモードのみになると危険です。国際化がますます進んでいくなかではこうしたタイプのコミユカだけではやっつけられません。日本のコミユカはその場の空気が共有される前提がないと役に立たないので、コミユカの真の価値を正確に理解して、モードを切り替える力を身に付けてください。

次に「キャラ」という重要な概念についてお話ししましょう。学校空間におけるキャラの使い方は、お笑い芸人が自分の芸風を差別化して目立たせるための「キャラを立てる」といったことがモデルになっています。キャラとはその人の同一性を示す記号です。言い換えれば、その人がどの空間にいてもその人であり続けるための記号のこと。キャラの面白いところはその決まり方です。

キャラは□ X が決めるのです。「いじられキャラ」とか「※毒舌キャラ」とかなんとなく割り振られていく。□ A、キャラはその人自身の特徴をあらわしてもいるけれど、一〇〇パーセント一致もしないという、ふしぎな記号です。キャラ決めには「キャラはかぶつてはいけない」「急なキャラチェンジは危険」だとか細かいルールがいくつもありますから、そうした規則ゆえに、その人の性格と離れていくこともあります。本来の性格にふさわしくないキャラを割り振られた人は、しばしば「キャラ疲れ」を起こすといえます。

②キャラ文化がこれだけ普及しているのは、もちろんメリットがあるからです。キャラがわかっているとコミユケーションがしやすく絡みやすい、しかも、お互いのキャラをいじりあっているだけで、コミユケーションを延々と続けられます。□ B、キャラはコミユケーション※ツールであると同時に、コミユカの産物でもあるんですね。最近「日常系」というジ

ヤンルの漫画があります。有名なのは『けいおん!』です。高校の軽音楽部に所属する女の子たちが、お互いのキラキラいじりを延々と続けるだけの日常が描かれています。こうした空間はまったくとして非常に居心地がいいものですが、現実には不本意なキラキラを決定されてしまった場合は「キラキラ疲れ」ということが起きるかもしれません。

「キララ」に関連した大きな問題もあります。スクールカーストです。経験したことがある人もない人もいるかと思いますが、スクールカーストとは教室内身分制のこと。昔から学校のクラスはいくつかの仲良しグループに分かれるものでしたが、いまはそれが上位グループから下位グループまで※序列化される現象が起きています。カースト間の身分差は、③一年間は固定され、カースト内の関係は流動的です。

なぜスクールカーストが便利かというと、※上意下達の仕組みを運営しやすいからでしょう。カースト上位の生徒が発言すれば、それは逆らえない空気を生み出して、クラスの決定事項になる。何を決定しても、誰からも異論は出ません。それが決まりだからです。逆にカースト下位の人は自分から発言は控ええます。これはいわば「プチ ※全体主義」です。※明文化されたルールもなく独裁者もない、しかしみんな自分の意図を抑え込んで、この曖昧な秩序に従わざるをえない。この危険な状態をもたらしたのも、コミュニケーション ※偏重主義であり X ④です。

実は、スクールカーストを解体するのはわりに簡単です。カーストの決定は席が隣りだったなど、物理的距離の近さがかなり重要なので、解体しようとするなら定期的に班替えや席替えをすればある程度予防できる。空気なんて、その程度のいい加減なものです。空気は引っ掻き回さないとよどんで、腐っている傾向がありますから、④それを自覚した場合は積極的に声を上げて崩していただく。

カースト内で起こるいじめは「いじり」であるとよく言われています。『りはめより100倍恐ろしい』という小説を読んだ方はいますか？ これは高校生が携帯で書いた小説としてたいへん話題になりました。「りはめより」というのは Y ④一〇〇倍おそろしいという意味です。いじりは目に見えませんが、当事者が「これはいじりだから」と言ってしまうと、学校側も周りの人も「いじりだったら口をはさむのも ※野暮なことだ」と手を出せなくなる。しかし、はっきり言っておきましょう、いじりはいじめです。芸人はいじられることでお金になります。みなさんはいじられても嫌な思いをするだけです。不快ないじりはいじめであると認識することが、間違ったコミュニケーションを逃れるひとつのきっかけになると思います。

(斎藤環 『つながることと認められること』)

※(文中のことばの意味)

無謀 : 深い考えのないこと。

コミュニケーション至上主義 : コミュニケーション能力が異常なまでに評価される状況。

翻弄 : 思うままにもてあそぶこと。

モード : 形式。

毒舌 : 意地の悪い皮肉。

ツール : 手段。

序列化 : 一定の基準に従って、順番に並べること。

上意下達 : 上の者の考えや命令を下の者に伝えること。

全体主義 : 個人は全体を構成する部分であるとし、個人の自由や権利より全体の利益を優先すると

いう思想や体制。

明文化 … はっきり文書として書きあらわすこと。
偏重 … 一方ばかりを重んずること。
野暮 … 気がきかないこと。

問1

A

・

B

にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

A

 … ア また イ たとえば
ウ しかし エ だから

B

 … ア つまり イ でも
ウ さらに エ また

問2

I

と

III

にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 主體的 イ 機械的 ウ 感情的
エ 合理的 オ 受動的 カ 感傷的

問3 ———線①「共同責任は無責任」とありますが、なぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 全員の総意で決めたはずなのに、その決断に責任を取る人間がいないから。
イ その場の雰囲気ふんいきで決めたことなのに、誰か一人に責任を押しつけるから。
ウ リーダーとなれる人間がいないので、いつまでも決断ができないから。
エ その場の勢いだけで決めているので、その決定に全員消極的になるから。

問4 ———線②「キャラ文化」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日常生活において笑いを取るために、芸人と同一の特徴を表す記号を決めること。
イ 日常生活においてコミュニケーションをとるために、他人との関係を表す記号を決めること。
ウ 学校空間において他人と差別化するために、個人の性質を表す記号を決めること。
エ 学校空間において個人を目立たせるために、本来とは違う性格を表す記号を決めること。

問5 ———線③「一年間は固定され、カースト内の関係は流動的です」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他クラスのグループとの関係は変化しないが、自クラス内での関係は変わる可能性もあるということ。

イ グループ内での関係は変化しうるが、グループ同士の序列はクラス替えがない限り変わらないということ。

ウ グループ間で人が移動することはありうるが、クラス替えによるグループの解体はありえないということ。

エ 上位グループと下位グループの地位は変動するが、グループ内の関係は変化しないということ。

問6 Xに共通してあてはまることばを、文中から漢字二字でぬき出しなさい。

問7 ———線④「それを自覚した場合は積極的に声を上げて崩していただく」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 発言力の強い生徒の意見に他の生徒が従うようになっていくことに気付いたら、グループ同士の上下関係を変えるべきだということ。

イ 他人を気にして自分の意見が言いづらい雰囲気になっていくことに気付いたら、友人同士の距離感を変えるよう具体的に行動すべきだということ。

ウ クラスの友人たちの中で上下関係がはっきり別れはじめてきたと感じたら、上下関係をなくすためにルールを見直すべきだということ。

エ 学校のルールによって仲良しグループが固定化されていると感じたら、一人ひとりが実際に行動してグループから離れるべきだということ。

問8 Yにふさわしい内容を、十字程度で考えて答えなさい。

問9 筆者は**文章1**のあと、**文章2**のように述べています。
文章1・2を読んで、筆者の伝えたいこととして最もふさわしいものをあとの中から一つ選び、記号で答えなさい。

文章2

それから、みなさんには「演技」をしてほしい。いまやほとんどの教室空間はキャラ空間ですよね。どうせそのキャラを受け入れるのであれば、演じている自覚を持っていた方がいいと思っっています。別人格を演じている自覚があれば、たとえ少々いじられても、本来の自分自身が無傷で済みます。何度も言うようですが教室空間の空気の支配やカーストなどから押し付けられたキャラはあまり価値がありません。演技の自覚を持つことができれば、キャラの**※**弊害は最小限に止めることができるので、ぜひ演じていただきたいと思います。

※（文中のことばの意味）

弊害 … 害になること。

- ア 自分は自分であるからこそ、かけがえのない存在であるという自覚を持つべきである。
- イ 自分に割り振られたキャラをまっとうすることが、自分を大切にすることにつながる。
- ウ 他人にいじられたときは我慢せず、勇気を出して助けを求めらるべきである。
- エ 自分が傷つかないために、押しつけられたキャラを捨てる必要がある。

問題は次のページに続きます。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

東京の高校に通う美緒は、学校でいじめにあい、学校に行くことができなくなっていた。しかし、母親とぶつかり家を飛び出し、父方の祖父の実家がある岩手の工場で、羊毛を紡ぐことや染色など祖父の仕事を手伝っている。

「ねえ、おじいちゃん」

離れたところから「なんだ？」という声がした。

「学校のこと、どう思う？」

「そうだな、と言って、祖父が煙を吐いた。」

「どんな形でも、高校は卒業しておいたほうがいい」

「……そうだよね」

「高校を出ておけば、染織に興味があるのなら、その関連の大学で学ぶこともできる」

そんな大学があるとは知らなかった。

どこにあるのか聞こうとしたが、暗い顔で煙草を吸っている祖父が少し怖い。

「じゃあ、学校をやめるのやっぱり良くない……よね」

良くも悪くもない、と祖父の声がした。

「ただ、腹をくくるだけ。選んだ道でこの先何があるうとも、引き受ける I を決めるだけ」

「それができなくて……困ってる。腹をくくる？ どうやって？ そんな勇氣があったら悩まないよ」

「何を言っているのか」

祖父の苛立たしげな声を聞き、※欄干に置いた手がわずかに震えた。

「おじいちゃん、怒ってる？」

怒ってない、と祖父が大きく煙草の煙を吐いた。

「私がぼやをだしたとき、あんなに度胸が据わっていたのに。勇氣があるから、美緒は今、ここでこうしているんだ」

川面に目を落とすと、四匹の鮭が上流に頭を向けていた。少しでも動きを休めたら、あっけなく流されてしまう。

速い流れに耐え、魚たちは※渾身の力で川を上がっていく。

「でも、私、逃げてばっかだ。流されてばかり。※留年だって、自分で決めたわけじゃない、時間切れでそうなったんだ。私……」

川岸に目をやる。昼過ぎに見た鮭の死骸が ㉠ よどみに沈んでいた。

「あの鮭みたいだ。みんな、ちゃんと川を上っていくのに」ポケットから革製の携帯灰皿を出すと、祖父が煙草を消した。

「あの鮭は流されたんじゃない。為すべきことを為して力尽きたんだ」

「じゃあ私と違うね」

祖父の声がいつになく冷ややかに感じられ、 ㉡ 美緒は奥歯をかみしめる。

「私、力尽きるほど、為すべきことをしてない。染めたり織ったり、毎日夢中になってやってるけど、もしかしたら、学校のことから目をそらしたくて夢中になってたのかも」

「それじゃないのかな。駄目だ、明日、お母さんに会って、悟が決まらないのかな。駄目だ、明日、お母さんに会って、なんて言ったらいいんだろう」

「落ち着け。少し歩かか」

橋の中央から引き返すと、祖父は中津川に沿った小道に入っていた。黙って、あとに続く。

東北電力の建物を越えると、柳の木の陰から雑貨屋「ご

「ざ九」の瓦屋根と白い土塀が現れた。

長く続く土塀に沿って、柳の木が数本植えられている。最初の柳の下で、祖父が立ち止まった。ポケットから藍色の薄い布を出し、首に巻いている。

「おじいちゃんのもそも『※香葉の布』？」

ささやくような声で「そうだ」と祖父が答えた。

「さつき、※シヨールームで②私が言ったこと怒ってる？」

「怒ってはいない。植物染料も化学染料もそれぞれの良さがある。ただ……」

祖父が川に目をやった。午後の日差しを反射して、水面が金色にきらめいている。

「植物染料は色止めをしても色が褪せていく。特に直射日光に弱い。私たちが作るものは上着やコートといった、外で着るものだ。日差しで色が褪せては困る。だから化学染料を用いるんだ」

風が吹いてきた。手が冷えてきたのでポケットに入れると、羊のマスケットに指先が触れた。

羊の毛からつくる※ホームズパンは育っていく布だ。年を重ねるごとに糸から余分なものが抜け落ち、服にすれば、年々、着心地の良さが増していく。子どもや孫にも譲れるほど丈夫な布は、たしかに色のもちも大事だ。

「さつきは思いつきでフワツと言った。ごめんなさい」

「誰もが一度は思うことだ。美緒のおばあちゃんもそう思ったから家を出ていったんだ」

「だから……出て行かなくても。そんなに、そんなに許せないもの？」

「見解の違いの差は、なかなか埋められないものだ」

中の橋が近づいてきた。この橋には花が盛り込まれたハングバスケットが手すりからいくつも吊り下げられて

いる。

橋に飾られた花に祖父が目を向けた。

「自然が生み出すものには命という力がある。人間がつくるものには命がない。だからこそ職人は、自分がつくるものに命を吹き込むことを夢見る。私にとつてそれは、つくった布が、着る人の身体を彩り、温め、守ること。いつまでも飽きられることなく、人とともに在り続けること」

祖父が首に巻いた藍色の布に触れた。

「しかし、香代は命を吹き込むのではなく、植物の命を布に写し取りたいのだと言った。命なきものに命を吹き込むとする私の気持ち、つまり科学技術とは※不遜な技だという。どちらもまったく譲らずに別れ、香代は一人で郷里に帰って工房を持った。納屋みたいな古家を借りて」

精神的にずいぶん参っていたらしい、と祖父がつぶやいた。

「でも、私も同じだ。それからしばらくして美緒が生まれた。※あのシヨールを作るのをきっかけに、再び二人で話をしたり、食事をしたりするようになった」

「③糸みただね」

祖父を見上げると、不思議そうな顔をしている。

「初めて糸を紡いだとき※太一さんに教えてもらった。『切れたって、つながる』」

柳の枝が風に揺れている。肩に触れたしなやかな枝を、

美緒は左右の手でそつとつかむ。

「右と左の糸を握手させて、⑥よりをかければ必ずつながるって」

柳の枝を胸の前でつないでみせると、祖父が笑った。

「たしかにそう教えてきたな。私たちの糸によりをかけたのは、美緒の存在だったわけだ」

柳の向こうに、太一と訪れた「喫茶ふかくさ」が現れた。夏の間は涼やかな緑の葉に包まれていたが、紅葉の季節を迎え、建物のまわりの草木はさまざまに秋の色に変わっている。

肩に落ちてきた黄色い葉を祖父がつまんだ。

「この分だと岩手公園もきれいだろうな。盛岡城の跡に行つたことはあるか？」

ない、と答えると、「それはいけない」と祖父が歩き出した。

「盛岡に来たら一度は行かなくては。特に十代の若者は」

「どうして？ 二十代になつたらだめなの？」

行けばわかる、と祖父は笑つた。

盛岡城の跡地の公園には建物はないが、**※**豪壮な石垣がたくさん残つていた。

迫力ある石の壁を背景に、赤や黄色に色づいた木々がどこまでも続いている。

城の二の丸へ続く坂の上から、美緒は来た道を振り返る。「こんなに真つ赤な紅葉、初めて見た。黄色いのはよく見るけど」

「東京は銀杏の木が多いからな。ただ、黄色にしても赤にしても、紅葉は寒い場所のほうがきれいだ。冷たい空気が色を研ぎ澄ませるんだ」

「じゃあ、北海道とか東北で見るといいんだね」

「すなわち、ここだ」

ゆるやかな坂を右に曲がると、広場があった。色づいた木々の向こうに石碑が建っている。

祖父が石碑の前に立った。**※**石川啄木の『**※**不来方のお城の

草に寝ころびて』の**不来方のお城**はここだ。これがその歌碑。『空に吸はれし十五の心』。美緒ぐらいの年の頃に啄木もここに来たわけだ

「私より年下だね」

「二つや三つの差など、私から見ればたいして変わらないよ」

草に寝転ぶかわりに木の下に行き、空を見上げた。

鮮烈な赤い葉が空を埋め尽くしている。あと数日で枝から落ちる葉が、空に向かって叫んでいるようだ。

その色のなかにいると、植物の命を布に写し取りたいと願つた祖母の気持ちがわかる。

その一方で、科学の力でどんな色も作り出せる祖父の技にも**憧れる**。

隣に並んだ祖父が、木の幹に手を触れた。

「美緒のお祖母ちゃん……香代は独立してから、麻や絹も織るようになったんだ。紅花、茜、藍、びわ、よもぎ。薬

効のある植物の色を布に染め、肌着から上着、子どもからお年寄りまで、佳い布で人を包みたいと考えていた」

「だから、肌触りがいいんだ」

ネックウォーマーに手をやり、布の感触を美緒は確かめる。

きつと、祖母は何度もこうして布に触れ、糸や織りの具合を考えたに違いない。

祖父が首に巻いた香葉の布をはずし、**④**隅に縫い付けられたタグを見た。

「でも、売れなかった。志高く、佳いものをつくってもほとんど売れない。それでは生活していけない。心もくじける。それなのに誰にも助けを求めず、一人で悩んで絶望して。……私は知らなかった。香代は**※**微塵もそんな気配を

私に見せなかつたから」

祖父が藍色の布を丁寧ていねいに畳たたみ、ポケットに入れた。

「香代が死んだあと、知り合いに連絡れんらくを取るために業務日誌を見たんだ。それを見て知った。販路はんろや資金繰りしきんぐりに悩んで、ひどく追い詰められていたことを」

ゆつくりと、祖父が歩き始めた。

足元からひそやかに、落ちた葉を踏ふむ音がする。

「戻もどってくればよかつたんだ。どうして助けを求めなかつた。一言、相談してくれば」

そうじゃない、と祖父がうなだれた。

「私が、戻もどってこいと言えよよかつたんだ」

一人ごとのように、祖父は言葉が続ける。

「香代が死んだ二ヶ月後、花巻の工房を片付けていると、人が来た。『香葉の布』を扱あつかいたいが、連絡がつかないの直接来たという。その二週間後に大口の購入こうにんの申し込みがあった。肌の疾患しっかんに悩む子を持つ親御おやごさんたちのグループからだ。大量にあつた在庫はほとんどが※捌はけた」

II

ネックウオーマーを指差すと、祖父はうなずいた。

「前例のない道を進むとき、不安はつきものだ。空に手を伸ばすように、手応えのなさに絶望することもある。でも、誠実な仕事をしていけば、応えてくれる人は必ずいる」

道を曲がると、赤い欄干の橋が延びていた。本丸と呼ばれる、城の天守閣が建っていた場所へ続く道だ。

向かいの豪壮な石垣へ渡わたされたその橋を通り、階段を登る。

視界が一気に開けた。

まっすぐに伸びた道の両脇りょうわきに、真紅しんくの木々が立ち並んでいる。落葉が一面に広がり、空も地も、澄んだ紅に染まっ

ていた。

「おじいちゃん、おばあちゃんは何で亡なくなったの？」

「山で死んだんだ。染料の植物を採りにいった先で。自殺だという人もいるが、それは違う」

祖父が地面に落ちていた葉を一枚拾った。

「帰ったら、私と食事の約束をしていた。染料と一緒に山菜も採ってくるから、天ぷらをご馳走すると笑っていたよ。崖がけの下で遺体が見つかったんだが……手にタラの芽を握にぎっていて」

私の好物だ、と祖父がつぶやく。

「タラの芽を見つけて、きつと、夢中になって手を伸ばしたんだ。……時々夢に見る」

「どんな夢？」

「森のなかを香代が歩いている。かごには染料の植物がいっぱい入っているのに、山菜探しに夢中だ。タラの芽を見つけて走っていく姿に、私は必死で叫ぶ。その先は崖だ、行くな、帰ってこい。香代の耳には届かない」

祖父が大きく息を吐いた。

「美緒のおばあちゃんはすべてを捨てて、独立の道を選んだ。思うようにはならなかったが、何度繰り返しても同じ選択をするだろう。私もそうだ。だけど、もう少し……お互い、ほんの少しでも歩み寄っていたら。明日は美緒と三人で、上京していたかもしれない」

紅葉の向こうに岩手山が見えた。山の頂上にはうつつらと白い雪が積もっている。

「あとから考えれば、いくらでも賢明けんめいな方法は浮かぶ。しかしいざ、それに直面しているときは、何も思い浮かばないものなんだ」

「おじいちゃんでも？」

祖父が軽く目を閉じ、うなづく。
「身内だからこそ許せない、感情がもつれる。だけどそのままにしていたら、美緒……ずっとこじれたままだ。少しでもいいから、互いに歩み寄りななければ」
帰ってこい、と夢のなかで祖父は祖母に呼びかける。
⑤ 東京にいる父や母も、そんな夢を見るとときがあるのだからか――。

(伊吹有喜 『雲を紡ぐ』)

※ (文中のことばの意味)

欄干 … 橋の両側にあって、橋を渡る人が下に落ちないようにするための柵。
渾身 … 力いっぱい。
留年 … 学校で進級できないこと。落第。
香葉の布 … 祖母、香代がつくった商品の名前。
シヨウルーム … 作品の展示や販売をする所で、この直前に美緒や祖父たちはここで話をしていた。
ホームズパン … 家庭で紡いだ糸で作った織物。
不遜 … 思い上がっていること。
あのシヨール … 美緒が生まれた時に、祖母から贈られた真つ赤な布。
太一 … 美緒のいとこで、祖父の仕事を手伝っている。
豪壮 … かまえが大きく派手なさま。
石川啄木 … 盛岡出身の詩人。
不來方 … 盛岡一帯の古い呼び名。
微塵 … ほんのわずか。
疾患 … 病気。
捌けた … 商品がよく売れた。

問1
でぬき出しなさい。

問2
~~~~線①・②のことばについて、文中における意味として、最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① よどみ
- ア 水の底  
イ 水の浅いところ  
ウ 水流の止まったところ  
エ 水流の早いところ
- ② よりをかければ
- ア つないでねじりあわせれば  
イ 気合を入れて直せば  
ウ 特別な気持ちを入れれば  
エ ぬい合わせれば

問3

——線①「美緒は奥歯をかみしめる」とありますが、この時の美緒の気持ちを説明したものととして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が鮭を否定したようなことを言ったために、祖父の機嫌をそこね、言わなければよかったと後悔する気持ち。

イ 自分の言葉が祖父を怒らせ、結局祖父から見放されたと感じ、落ち込んでいると同時に自分の情けなさを責めずにはいられない気持ち。

ウ 自分に学校をやめてほしくないと、祖父は本心では思っているのだと感じ、祖父にも自分を理解してもらえなかったとがっかりした気持ち。

エ 自分の思いを一生懸命話しているのに、祖父からはそっけない言葉しかなく、自分は相手にされていないという悔しい気持ち。

問4

——線②「私が言ったこと」とありますが、どのようなことだと考えられますか。それを説明した次の文の□にあてはまることばを、文中から四字でぬき出しなさい。

ホームズパンを染めるためには、□を使う方が良いということ。

問5

——線③「糸みたいだね」とありますが、何が「糸みたい」のですか。文中のことばを使って五字で答えなさい。

問6

——線④「隅に縫い付けられたタグを見た」とありますが、祖父がその時「タグを見た」のはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「香葉の布」は田舎でつくられた無名の商品で価値がないのだということと考えたから。

イ 祖母が祖父に相談もせず一人で勝手に「香葉の布」と名前を付けた当時を思い出したから。

ウ 「香葉の布」はそのあつかい方が消費者にとって難しすぎたということと考えたから。

エ 上質な「香葉の布」をつくりたいという祖母の信念はわかるが売れなかったということを感じ出したから。

問7

——線⑤□にあてはまる美緒のことばとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「これがおばあちゃんの『香葉の布』？」
- イ 「これはおじいちゃんが取っておいたもの？」
- ウ 「おじいちゃんはその色が好きなの？」
- エ 「おばあちゃんはお金に困っていたの？」

問 8

——線⑤「東京にいる父や母も、そんな夢を見る  
ときがあるのだろうか」についてあとの問いに答えな  
さい。

(1) 「そんな夢」とありますが、どのような「夢」で  
すか。二十字以内で答えなさい。句読点なども字数に数  
えます。

(2) この時の美緒の考えを説明したものととして、最もふ  
さわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えな  
さい。

ア 学校での友人関係を見つめなおし、そろそろ東京  
に戻って学校に行くべきだろうかと考えている。

イ 父と母との関係を思い出し、わたしがいなくても  
父母は平気だろうかと考えている。

ウ 自分と父母との関係を見つめなおし、逃げずに父  
母と向き合う必要があるのかと考えている。

エ 学校での友人との関係を思い出し、いじめられた  
あの学校に戻るのはいやだと考えている。

問 9

この文章の表現と内容について説明したものととして、  
最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答  
えなさい。

ア 会話を多用することで作品にスピード感を出し、  
祖父は次々と自分のことを孫に語ることよって、言  
葉にはあえてしないが、早く美緒に立ち直ってほしい  
と心で強く願っている。

イ さまざまな色を使った表現を多用し、またあえて心  
情を詳しく説明しないで自然描写を重ねることで、登  
場人物たちの布や染色に対する繊細な感性や、自然を  
大切に思う気持ちを際立たせている。

ウ 作品中のたくさんの色の表現は、美緒がはじめを受  
けていた東京での暗い生活のイメージと対照的であり、  
岩手での暮らしが美緒を自立させ、幸せにするにお  
わせている。

エ 自然と人物の対比を通して、祖父は祖母との記憶を  
たどりながら過去の自分を見つめる一方で、美緒は心  
をかたくなに閉じ、祖父の話には耳を傾けないで自分  
の殻に閉じこもっている。

三 次の①～⑤にあてはまる動物に關係することわざを、あと  
のア～キから選び、記号で答えなさい。

ね ← ① ← とら ← ② ← たつ ← み ← ③ ← ひっじ ← ④ ← とり ← ⑤ ← い

ア 猿も木から落ちる  
イ 馬の耳に念仏  
ウ 飼い犬に手を噛まれる  
エ 牛に引かれて善光寺参り  
オ 藪をつついて蛇を出す  
カ 二兎を追う者は一兎をも得  
キ 山より大きな猪は出ぬ

四 次の——線のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答え  
なさい。

- ① 会社をバイシユウする。
- ② ケンチヨウ所在地。
- ③ テレビがコシヨウしてしまった。
- ④ 重要な書類がシンテンで届く。
- ⑤ 会議でサンピが分かれた。
- ⑥ 東海地方を經由して東京に向かう。
- ⑦ 駅前の並木道を散歩する。
- ⑧ 馬が暴れる。
- ⑨ 数々の功績をたたえる。
- ⑩ 話し合いの機会を設ける

これで問題は終わりです。